

## 「被爆69周年2014平和行動 in 広島・長崎北海道統一代表団」を派遣

原子爆弾が投下され今年で69年目を迎える中、連合北海道・原水禁北海道・北海道友愛KAKKINは8月4日～9日の日程で、のべ102名を「北海道統一代表団」として広島・長崎に派遣した。

8月5日の平和ヒロシマ集会で主催者挨拶にたった連合本部古賀伸明会長は、「今もなお多くの被爆者が放射線

障害に苦しんでいる。核兵器はいまだに世界に約1万7千発も存在し、人類は核兵器の脅威にさらされ続けている。」と問題を投げかけ、「世界の核軍縮を進める上で、世界で唯一の核兵器被爆国日本の果たす役割は極めて大きく、核兵器廃絶に向けた世論形成の先頭に日本が立つ、その中でも私たち労働組合や平和団体が国際的運動を牽引していかなければならない。」と述べた。また、全組織を挙げて取り組んでいる2015年核不拡散条約（NPT）再検討会議に向けた1000万署名についてふれ、「必ず1000万署名を成し遂げ、日本政府はもとより、会期中には国連事務総長に核兵器廃絶に向けた会議での議論を強力に後押ししていく。」と力強く宣言した。



「被爆体験の証言」では、被爆直後に約40日間意識不明となり、今もなお多くの病気を抱えながら語り継いでいる坪井直さんが当時の悲惨な様子を話された。

8月6日には、今回初めて連合北海道独自学習会を開催し、語り部の方からの証言として石井みちこさんから講演をいただいた。

7歳の時、爆心地から1.1キロの自宅で被爆。助けられた近所のおじさんと逃げまどう中、おじさんの息子と出会った。息子は目の前で倒れ、揺り動かしても動かず、すでに息絶えていた。4000度の熱が肌をチリチリ焼いていく中、医者のあるテントまでたどり着いた時には、腕から皮膚が垂れ下がっていて、それを切ってもらい包帯を巻いてもらった。山の斜面から広島の街を見ると、街は橙色に燃えていた。漠然ときれいだなと思った。はぐれていた父母と再会し、小屋に姉弟と避難し暮らした。時々、血を吐き尿や便にも血が混じった。にぎやかなカエルの鳴き声が響くのを聞いたとき、子どもながらに戦争が終わったのだと感じた。

石井さんはこの壮絶な体験を淡々と語られた。参加者はこの語りの中に、戦争の実相、真実の言葉の重さを感じた。また、平和の実現のため、これを語り継いでいかなければならない責務があることを強く感じた。



続く、8月8日の平和ナガサキ集会では、連合本部神津里季生事務局長が主催者挨拶にたち「連合は核兵器廃絶に向けてより一層の運動の強化と幅広い国民世論の形成が不可欠であり、行政や関係諸団体に幅広く行動への参加協力を呼びかけていく。」とし、「本集会において核兵器廃絶や



戦争のない世界に向けて、全体で意志を統一し、世界の恒久平和に向けたメッセージを発信できるよう協力をお願いしたい。」と述べた。また結びに「今回の集會に若い世代の方々が多数参加していることを非常に心強く思う。思いを語り継ぐ、そのことによって平和を実現し、核兵器を廃絶する。一人ひとりがその気になれば平和は実現しないが、一人ひとりがその気になれば平和は実現すると信じている。」と語った。

続いて、「次世代への継承」として、第17代高校生平和大使が紹介された。連合北海道と退職者連合で構成する北海道高校生平和大使派遣実行委員会で選出した、酒井福さんと植村知世さんが大使を代表してそれぞれ決意を表明した。酒井さんは「語り部の方の話を聴くと戦争の怖さや原爆の恐ろしさを感じることができるが、今、語り部の方の話を聴く機会が減ってきている。被爆者の方の生の声を将来10年後、20年後の子ども達の世代までつなげていけるような活動を行っていききたい。」と述べた。植村さんは「8月17日から国連欧州本部を訪問し、スピーチや署名活動を通して、私たちの平和に対する思いを発信していききたい。核兵器、戦争のない世界、平和な世界の実現をめざし、誠心誠意、活動していききたい。」と力強く述べた。



その後、歌と朗読（被爆体験等）による構成詩「親子で綴る平和の願い」が、連合長崎構成組織の組合員、家族（親子）等を中心に結成された約100名の仲間によって披露された。参加者は強く胸を打たれ、恒久平和と核兵器廃絶への思いを新たにした。また、ピースフラッグリレーとして、連合長崎より、平和根室集會に向け、連合北海道へ平和の思いとともに旗が引き継がれた。

統一代表団は広島・長崎においてピース・ウォークに参加するなど、それぞれ学習を深めた。広島では北海道独自企画として原爆死没者慰霊碑への献花を、長崎では被爆地「淵中学校」への墓参を行った。

連合北海道はこれからも核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現をめざし、職場や地域における核兵器廃絶運動を粘り強く取り組んでいく。